

特定非営利活動法人 太平洋戦史館

# 戦史館だより

2024年5月30日発行  
 戦史館事務局〒029-4427  
 岩手県奥州市衣川陣場下  
 41番地 髯オフィス花岡  
 編集発行人 花岡千賀子

会長理事 岩淵 宣輝 事務局長 花岡千賀子 ☎0197-52-3000 FAX 0197-52-4575

今年の春は寒暖さが大きく、日替わりで夏と冬が交互にやってきたような日々でした。会員の皆様、いかがお過ごしでしょうか。体調管理に気をつけて、これからやって来る夏の猛暑を乗り切っていきましょう。

前号の戦史館だよりでは、インドネシア共和国ビアク方面の遺骨帰還事業が8年ぶりに再開されて戦史館から3名が派遣されたこと、空白の8年間に現地の事情がガラッと変わり、仮安置していた遺骸が紛失か盗難か？ 行方不明になった事実、そして専門家の鑑定結果で、現地人の骨が混ざっていて、日本兵の遺骸かどうか証明できないという残念な結果になったことをお伝えしました。

会員からの反応は言葉にならない『絶句』。「2015年に百体ほどあった遺骸はいったい何処へ行ったの？」という疑問の声も寄せられました。

会報報告だけでは何のことやら？とも感じますよね。6月22日の報告会で、派遣団に参加した小澤さんから現地の様子を伺う予定です。会場：秋葉原、ご参加お待ちしております。

## 5月20日 羽田出発のビアク派遣 6月1日に帰国予定

当初、推進協会は今年1月に次のビアク派遣を予定していたのですが、計画を仕切り直し、新年度5月に同じメンバーで出発しました。

戦史館からは3名が参加。写真はビアク空港に到着した直後、左から小野寺さん村山さん安島さん。今回、調査が予定されているポイントは3カ所。ロブキ、ベイシでの搜索、そして日本政府が建立した『第二次世界大戦慰霊碑』があるパライ海岸の裏側です。慰霊碑の敷地の裏側に崩れた壕の跡があり、この壕の中に数百人が閉じ込められたと伝えられている場所ですが、入り口が10トンの岩で塞がれていて、1974年に厚生省が発掘と調査を断念した…と記録が残っています。今後の調査は大がかりで掘削機械も必要になるでしょうが派遣団には毎回インドネシア側から数名が同行しているので、現場で両国が話し合い調整しながら進めてほしい！ 前回のビアク派遣の結果を受けて、早急に解決しなければならない問題…遺骸盗難事件の警察捜査は進んだのか？ 遺骸の情報提供者との関わり方や、搜索方法はどう改善されたのか？ 新たな仮安置所は何処に？ 1つ1つ解決しなくてはならない課題に、さらにあのユスフ・ルマノペンが次に何か仕掛けてくるのではないかと心配の種も…。現地から届くリアルな報告からは派遣団の苦悩が伝わってきます。



今回戦史館から参加した3名は60才台の“若い”会員で、小野寺さんと村山さんは大叔父さんがビアクで戦没した遺族です。派遣行程の中、26日の休養日に現地慰霊が実現しました。モクメルで村山さんが、ボスネック海岸で小野寺さんが、それぞれ戦没した大叔父さんの写真を前にご供養をしました。6月22日の報告会で最新情報をお届けします。

今回戦史館から参加した3名は60才台の“若い”会員で、小野寺さんと村山さんは大叔父さんがビアクで戦没した遺族です。派遣行程の中、26日の休養日に現地慰霊が実現しました。モクメルで村山さんが、ボスネック海岸で小野寺さんが、それぞれ戦没した大叔父さんの写真を前にご供養をしました。6月22日の報告会で最新情報をお届けします。

## 西パプア州 マノクワリ・ヤカチ方面の調査 岩淵宣輝会長理事が参加

会員から「えっ？岩淵さん、昨年パプア州へ出発する直前にインドネシアから来ないでほしいと言われて、行けなくなったと書いてありましたが、また行けるようになったんですね。良かった…よかった」と言われました。まず戦史館だよりを読んで、内容も記憶してくださいありがとうございます。ちょっと違うのは、ダメと言われたのはパプア州で今回、調査で入れたのは西パプア州のマノクワリ・ヤカチ方面です。

昨年3月の事件は、戦史館だより 128号に掲載しましたが、岩淵がコミュニティの不特定多数とトラブルになっているという理由で「岩淵ぬきなら日本からの派遣団も受け入れる」とインドネシア側から要請された…まさに事件とも呼べるできごとでした。

その後、外務省にいろいろ調査してもらったのですが、どのようなトラブルなのか現地からは何も出て来なかったそうです。パプア州までは日本からの戦後賠償も経済援助も届かない…現地の人にしてみれば誰かに訴えたい…頻りにパプアへ通っていた岩淵がヤオモテに立たされることは不思議ではありません。インドネシアにとっては面倒な人間は入国させたくないのかも。この問題は解決まで少し時間がかかりそうです。

話を西パプア州調査派遣に戻します。行く先はマノクワリ、ビントニ、ヤカチ方面へ。2月26日羽田出発、3月11日帰国。戦史館からは3名が参加。長年、父の戦没地ヤカチへの現地慰霊を希望していた高知県在住の絹川律さん(1943年生まれ)、「姉の杖になるように」と律さんの弟の曾我部裕行さん、そして岩淵宣輝(1941年生まれ)。日本から7名、ジャカルタの日本大使館から3名、インドネシア側5名、チームの総勢15名の現地調査でした。

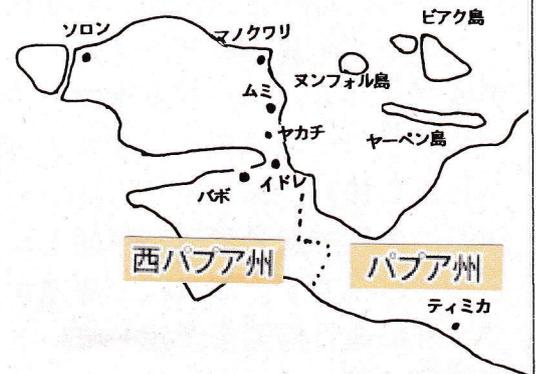
西パプア州の州都はマノクワリ。昭和18年11月、マノクワリに上陸した2万人の日本陸軍は即、食糧不足になり、イドレ方面に9千人が転進して自活せよという命令が下されました。机上で50万分の1の地図を見て、直線距離で200kmを南下するという無謀な行軍。ヤカチを経てイドレまで、山も湿地帯もある密林の中、後続部隊の道しるべとなったのは累々と続く屍だった…と伝えられています。

1971年の政府派遣遺骨収集団の報告書を読むと戦後初めてヤカチまでたどり着いたものの、雨期で河川が氾濫して一帯が水没していたため、収容を断念したと書かれています。

その後これまでマノクワリから帰還できたのは12柱。戦史館が働きかけて1999に帰還した71柱のうち、ビアクから59柱、マノクワリからは12柱…。

ではこれだけ犠牲者が集中している敗走路に沿って遺骸発見の情報が寄せられることは無かったのでしょうか？最近、厚労省が情報を握りつぶしたかもしれない…その可能性の高い資料を発見しました。

それはジャカルタの駐インドネシア塩尻大使から外務大臣にあてた公電で、マノクワリで日本兵の遺骸が発見され、その報告を受けた一等書記官が、詳細な情報を聞き取って報告した公文書です。遺骸3体と遺留品の写真も添えられています。大使から外務大臣へ、そして厚労省へ確実に伝えられたのですが…はて？公文書の概要は次のページに掲載。



公文書の日付は2008年10月。遺骨の発見者はマノクワリ在住DD氏で、友人の新聞記者を通じて、日本大使館へ連絡したようです。発見時の状況は、家族が家を新築しようとして庭のバンヤンの木を伐採したところ、根本から3体の白骨遺骸を掘り出した。周囲にバンヤンの木は見られないので、日本兵が葬られた場所の目印に植えられたのではないかと推測した。遺骸と遺留品、硬貨、金歯などの写真が添えられ、遺留品の写真からは第14野戦飛行場設定隊の認識票、千人針に縫い付けたであろう十銭硬貨も。関係者の連絡先も添付されています。大使館の書記官が発見者に電話で確認し、本人からは、遺族または日本政府による遺骨と遺品の引き取りを要請しているが、引き取りできない場合は再度埋葬し、遺品は希望するコレクター等に譲るとしています。この書面を厚労省に伝達し、その結果を返信してほしい…という主旨の電信文です。

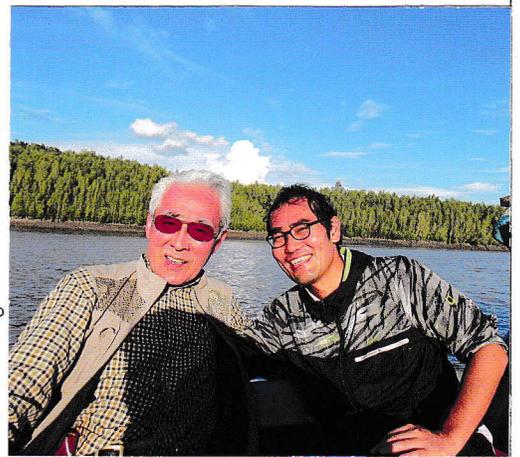
はて？ 塩尻大使から外務大臣あての公電を伝えられた厚労省は、どう対応したのでしょうか？

この事実を確認しようと派遣チームは2月29日、公電に記された場所マノクワリ市アンバン地区を訪問しました。残念なことに公電文に書かれたとおりになっていて日本兵の可能性の高い遺骸3体は再埋葬され、報告者とその息子さんはすでに亡くなっていました。

2012年4月にヤカチ周辺で、日本兵と思われる遺骸と遺留品を発見したという愛知県在住の男性の情報にも接しました。発見時の詳細な情報をすぐ厚労省に提出し、さらに1年後に代議士秘書の紹介で外事室を訪問して早期収容を申し入れたにも関わらず、何の進展もなかったと話されていました。

2016年2月、未送還情報収集事業の一環で、この方面の調査を計画していた戦史館と厚労省とジャカルタの日本大使館も同じ行程でマノクワリからイドレまで調査する企画が進んでいました。ところが出発3日前に教育文化省が難色を示したことで派遣はストップ。「インドネシア側の調査が済んでからでない」と日本の調査は認めない」という理由は、ドタキャンになる度に繰り返され、お決まりの約束ごとのようでした。

今回ヤカチまで辿り着けたのは、日本大使館がインドネシア側に断られても断られても、しつこく働きかけた結果でしょう。インドネシア教育文化省の担当部門に、一緒に調査を呼びかけたことで、マノクワリからイドレまでの搜索がやっと始まりました。写真はヤカチ村からマノクワリまでの帰路、ヤカチ河を船で戻る岩渕、大使館一等書記官の中尾さん、撮影は一等書記官の古谷さん。☆ヤカチ方面は岩渕が報告します。参加の申込み方法は封筒裏面参照願います。日時：6月22日午後1時～4時  
会場：秋葉原カンファレンスセンター 地図送付します



## 今後の遺骨帰還事業 現地派遣 参加者募集

昨年からはインドネシア方面の遺骨帰還事業、調査派遣、遺骨収集派遣が再開されました。今年度は8月上旬にジャヤプラ・サルミ方面、11月にビアク方面の派遣が計画されています。来年度以降も継続募集が予想されます。参加希望の会員…会員ご自身でなくても会員の身内の若い人を推薦することも可能。インドネシア方面の派遣には戦史館から3名程度の推薦枠が設けられています。戦史館から希望者を遺骨収集推進協会に推薦する仕組みなので、渡航費、滞在費などの個人負担はありません。参加推薦ご希望の方は、戦史館へ。